

学びの風便り

リーディングスクール通信 36 R7.1.15

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

特集！学びの改革のあゆみ 鎌田中学校・開明小学校

開明小学校 教師の「『個別最適』で『協働的』な学び」が同僚性を高める

「クリームあんこ」「チーズ」「ブルーベリーアイス」「カスタード」「チョコ」…開明小の研究グループのなんともおいしそうな名前です。「みんなが『幸せ』な学校」を目指し「子どもの『～たい』からはじめる授業づくり」に取り組んでいる開明小の「重点研究会＝たい焼きタイム」から、たい焼きの中味にちなんで名付けられました。



開明小学校では、めざす子どもの姿『学び』を楽しむ

子ども」を真ん中におき、それを実現するためにそれぞれの先生たちが決めだした「やりたいこと＝自己課題」の探究を軸に校内研究が進められてきました。

2学期は「たい焼きタイム」で先生たち一人ひとりの「自己課題」に挑戦する授業づくりをグループの先生たちと相談しながら進め、授業公開し学び合ってきました。授業公開は信州大の谷内先生、中信教事の吉沢先生を助言者として、2学期だけで4回実施。毎回

の4人の授業者は手上げ方式で、あっという間に決まりました。まさに「～たい」に満ちている先生たちです。

授業後の研究会では授業の具体的な子ども姿について、毎回、活発で和やかな語り合いが続きます。授業者の先生と親身になって一緒に授業を作ってきたことで、グループの先生たちにとって公開授業が「自分の授業」になっているのでしょう。先生たちが子どもたちの「内面」にまで思いを寄せて語り合うことが、当たり前のように行われます。

助言者の先生からも「子どもたちの姿を通して先生たちがエネルギーを高める素敵な時間」「みんなが意欲に満ちて前を向いていける研修会」と、開明小の先生たちの温かさ・前向きさに賛辞が贈られました。

日にち	① 10月17日(木) 吉沢先生	② 10月30日(水) 谷内先生	③ 11月18日 吉沢先生
クリームあんこ	保科 T		柏原 T
チーズ	野村 T★	瀬田 T	赤羽 T
ブルーベリーアイス	大沢 T★・柿坂 T★	佐田 T	
カスタード	深見 T		深見 T
チョコ		神澤 T	立石 T
さつまいも			



先生たちの「思い」をたくさん聞いて伝えたい！

研究主任の横澤先生は、先生たちの様子について、次のように話されます。

校務の振り返りで、先生方から「自己課題について自由に取組めた研究のスタイルがよかった」という声を多くいただきました。「参観したい授業がたくさんあったけれど、クラスを空けられなくて残念」という前向きな声も嬉しく聞きました。先生たちは少し声をかけると「研究」の話題にすぐに乗ってくれて深い話ができます。こんな先生たちの雰囲気がとてもありがたいと思います。研究を「楽しい」と思った人がいれば、「苦しい」と感じた人もいたはず。みんなの声をたくさん聴いて、「フェス」では「開明小」の「今」として伝えられればと思っています。

「対話」を重ね、ともに「創る」ことで

このように、個々の課題を協働的に学び、同僚性をますます深める開明小の先生たち。百瀬校長先生に、このような先生たちの雰囲気が形作られた理由を伺ったところ、次のようにお話しされました。

研究グループの先生たちが、学年や教科、年齢を越えて、緩やかに、悩みや雑談も含めて、様々な話を重ねることを大事にしてきた中で先生たちの関係性が高まったのを感じました。そのうえで、お互いの「自己課題」について関心を持ち合い、アドバイスをしあいながら力を合わせて願いを実現する授業を創ることを重ねてきました。このことが今の雰囲気につながっていると思います。4月のスタート時、職員全員で岩瀬先生（軽井沢風越学園校長）の「学級づくりワークショップ」に参加したことも、大きな力になりました。

2月には開明小の先生たちみんなが、取組んできた自己課題の探究について、同僚・保護者・地域の方向けに「アウトプット」する機会を持ちます。『『教師の学び』と『子どもの学び』は相似形』と言われますが、その言葉そのままに、「主体的・対話的に深く」学び、挑戦を続ける開明小の先生たちです。

鎌田中学校 教科の横断で探究の芽を育む！

リーディングスクールとして2年目を迎える鎌田中学校。総合的な学習の時間「KMD タイム」で培ってきた学びを、教科学習に生かしています。「ある教科の学びが他教科の知識や技能と結びつき、他教科の学びの質の向上に繋がる」ことを願い、実践を重ねてきました。今回は、その中から社会科の歴史での学びが、美術や国語の実践に生かされた事例を紹介します。

芸術作品を鑑賞する ー美術と社会のコラボレーション授業ー

その名を知らぬ者はいないほど著名な芸術家「パブロ・ピカソ」。1881年にスペインで生まれ、1973年にフランスで亡くなるまで、彼の生きた時代は、戦争と隣り合わせでした。スペインの内戦を機に描いた「ゲルニカ」は有名な作品です。「かくかく」とした特徴的な絵は、私たちが見て物事を捉える遠近法による描き方ではありません。様々な角度から見た様子を1枚の絵にまとめられています。

鎌田中学校では、彼の作品を鑑賞する美術の授業を行いました。作品のタイトルは「泣く女」。戦争を背景に暗くて悲しい時代に、どこか明るい画風で描いている作品です。美術の授業では、これまでも画法や色合いに目を向け、作品をじっくり鑑賞する時間を設けてきましたが、作品に表現される彼の熱情をもっと生徒に感じてほしいという願いがありました。ピカソが生きた時代背景を理解できれば、作品の見え方が一層深まるのではないかと感じていました。そこで、教科の枠を超えて、ピカソの生きた時代を社会の授業で強調して扱いました。これにより、生徒たちはピカソの生きた時代に関心を向けて鑑賞し、次のような感想が寄せられました。

… 『初めて「泣く女」を見たときは「カクカクしていて怖い絵だな」と思いました。しかし、絵のモデルや描かれた時代、技法について知っていくと、ピカソの戦争に対する怒りや悔しさを色や形を工夫して全力で伝えているように感じました。』



美術の授業風景

「今、自分は、自分の道を歩いているとわかった」 ー国語と社会のコラボ、更なる「問い」にー

中学校3年の国語の授業では「故郷」という教材を扱います。「故郷」は1910年代から1920年代にかけて、中国の農村部の貧困と社会の混乱を背景として描かれた小説と言われ、ここ数十年来教科書に掲載されています。20年も離れた「故郷」に戻った主人公は、幼少期の風景や一緒に遊んだ幼馴染のすっかり変わり果てた様子を目の当たりにし、様々な感情を抱きながら「故郷」を後にします。

生徒は「故郷」を描いた時代に身を置いて内容を吟味し始めています。「故郷」は、多様な登場人物を理解するだけでも十分な時間を必要とする内容ですが、内容理解に加え、鎌田中学校では作者である魯迅（ろじん）の「世の中を変えたい」という願いに思いを馳せてほしいと望んでいました。社会の授業と連携し、当時の時代背景を歴史的に捉えたことが、生徒が「故郷」を深く理解しようとする学びに繋がっています。

しかし、どうして「故郷」は何十年も国語の教科書に教材として掲載され続けているのでしょうか？ 実は、この問いは教頭先生（国語科）からのものでした。鎌田中学校では、教頭先生もゲストティーチャーをします。今回の単元も教科担任とのコラボレーションで授業が行われました。そして、この答えの無い問いを投げ掛けられた生徒は、歴史的側面から、あるいは登場人物の生き様からメッセージを汲み取り、自分なりの答えを導き出そうと学びを進めています。

「物事の背景にある事象は繋がっているはず。教科という線引きで学びを区切るのはもったいない」。今回の授業を担当した先生方は、実感を込めてこう語ります。本来、繋がりが合っている学びの連続性を途切れることなく紡いでいく。教科を横断した学びの在り方を模索する鎌田中の挑戦は、さらに進展していきます。